

政治的論題による倫理的思考力の育成

——ディベートの発展的学習方法を活用した試み——

津田 博

一 基本的な考え方

私は高校教員として、高校生の時期には自分の意見を形成することが必要であり、理論で相手を理解し、他者を説得することのできる能力を獲得させる必要があると考えている。特に大切なのは、相手を論破することではない。議論を戦わせる過程を通して、異なる立場の知識や考え方を知り、自分やチームで構築した理論と対比することで自らの価値観が揺さぶられ、柔軟な思考方法を身につけることではないだろうか。そのために、ディベートという手法を使うことにより育成することにした。

ディベートを行うには、まず解決すべき論題に内在する問題点を認識させるための基礎的知識が必要である。そのために、以下の「指導計画」に示すように、「導入」として、教師による四時間の講義形式による授業を行っている。その上にたって「自衛隊は増強すべきである」という論題を設定し、生徒に調査並びに資料収集を行わせている。生徒は、この過程を通して新たな疑問や不明な点に突き当たることになり、それを解明するために、さらに詳細な調査や論拠を明確にするための活動を経ることにより、探究心は深まり問題意識は鋭くなっていく事が期待できる。

さらに、収集した情報やデータを整理し、論題に対して肯定・否定の各々の側面から見つめ直して検討することから、論理の矛盾する点についても見抜ける多面的な思考を鍛えることができ、生徒自らが論理的思考力を獲得していくことになるのである。

一般的にディベートでは、立論をもとに主張を組み立て、相手方との対立点を明確にしながら「闘論」を行うため、結論を変えることはできないことになっている。双方の主張は一方通行のまま終わってしまいがちである。これでは、反論しながら自らの理論と対比することで個々の価値観が揺さぶられるという余地がないといえる。そこで、議論の中で自分の意見を変えてもよいというディスカッションの要素を取り入れた「自由討論」を設定し、次のような、四ラウンド制とした。第一ラウンドは立論、第二ラウンドは質問と回答、第三ラウンドは「自由討論」とし、第四ラウンドで結論を主張し、ディベートを締めくくることとした。特に第三ラウンドでは、肯定側から否定側というように主張の順番を区切ることをせず、順番も交互と決めず、正に自由に論じ合うことを行わせた。

ディベートの勝敗は、個人の判定表の合計点で決してしまうのが一般的である。しかし、これでは、審判員は単に自己の考え方と対比をするだけで評価を出して終わってしまう事になってしまう。審判員は、単なる「評価する聴衆」として参加するのではなく、異なる知識や思考方法に触れ、自身の持つ既成の価値観が揺さぶられることが大事なのである。そこで「ディベート」終了後、審判員には個人の判定表を勝敗判定の基礎資料として持ちよらせ、一〇分間を取って、班ごとで勝敗について議論をさせることにした。班ごとの議論終了後、その経緯を踏まえた「班別の判定表」を作成させ、勝敗の判定理由も交えて発表させることにした。

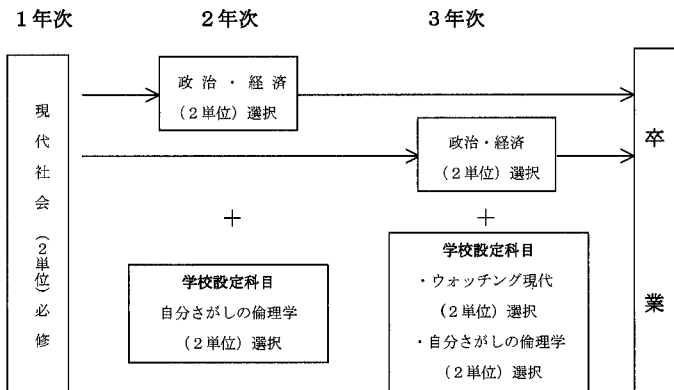
二 本校の概要

本校は、昭和四七年四月、神戸第三学区に第三番目の県立普通科高等学校として設立され、創立三九年目を迎えている。平成一四年四月、学年制より単位制に移行し、県下二校目の全日制普通科単位制高校に改編された。

「自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ」を基本に、主体的な学習活動を促し、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や資質、また生涯にわたって学び続ける意欲を培い、未来にむけて可能性を切りひらく「生きる力」をはぐくむことを基本的な教育理念としている。

単位制とは学年による教育課程の区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業を認めるシステムである。その最大の特徴は教育課程の編成がより柔軟であることであり、この利点を生かし、生徒の学力伸長、進路実現のためにより効率的な講座編成、少人数クラスでの授業、科目選択や進路決定におけるガイダンスの充実等、様々な工夫や先進的なシステムの導入を行っている。

教育課程は、一年次では基礎学力を定着させるという観点から、芸術（音楽・美術・書道）を除いて全員が共通の科目を履習し、二年次・三年次と進むにつれて選択科目の時間数が増し、各自の進路に応じたカリキュラム設計（時間割の作成）ができるようになってきている。



公民科の教育課程は、下図のようになっている。

この実践を行った学校設定科目「ウォッチング現代」は、生徒の興味・関心を基に、幅広い学習内容に触れる科目として二年次・三年次のいずれかで選択することができる。

一年次において「現代社会」(二単位)を必修として全員が履習し、基本的な学習を行っていることを前提に、現代の日本および国際社会を構成し動かしている政治や経済の仕組み、国際関係等の諸問題について課題を見つけて出し、その探究学習を行い、論理的な思考力や表現能力を育成し、生徒が生きる現代の社会との関わりについても考察ができる能力を培うことを目標としている。

三年次の選択者は二三名(男子一名、女子二名)であった。

チーム分けを行い、肯定側・否定側(各三名)、審判団(一班五名で三班構成)に、さらに司会者(一名)、時計係(一名)を決めた。

三 単元計画・評価

(1) 単元名： 国際社会の動向と日本の安全

(2) 単元設定のねらい： 現代の日本や国際社会が直面する平和と安全の維持について考察させるため、基本的な知識を習得させ、現状や問題点を認識させる。さらに、具体的な課題を設定し、多面的・多角的に追究させ、望ましい解決の方法について考察させる。

(3) 指導計画： ①イラク戦争を考える (1)

1時間

②イラク戦争を考える (2)

1時間

③ アフガニスタン略史

④ 平和主義と日本の安全 (1)

⑤ 平和主義と日本の安全 (2)

⑥ 調査、資料収集、考察、チーム分け

⑦ デイバート「自衛隊は増強すべきである」

導入

1時間

1時間

2時間

1時間

展開 (課題研究)

まとめ (本時)

資料 No.1

イラク戦争 (2003.3.20~5.2) を考える (その1)

1 イラクはどこ?



2 イラクが占拠した中東石油産出地
11200 年9月 11日 午前8時45分
① 占領の歴史地図がペンをなされる

- ① 1 戦前 () の石油産出センターに占領
- ② 戦中 1 次大戦時 () の石油産出地を占領
- ③ 戦後 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ④ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ⑤ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ⑥ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ⑦ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ⑧ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ⑨ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領
- ⑩ 1 次大戦後の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

2) 戦後の石油産出地

① () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

② () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

③ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

④ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

⑤ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

⑥ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

⑦ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

⑧ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

⑨ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

⑩ () の石油産出地を占領 () の石油産出地を占領

② () 戦後の石油産出地 () の石油産出地

③ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

④ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑤ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑥ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑦ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑧ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑨ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑩ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑪ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑫ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑬ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑭ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

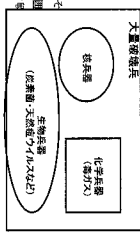
⑮ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑯ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑰ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑱ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地

⑲ イラク戦争 () の石油産出地 () の石油産出地



(4) 評価の観点

指導計画①②③について

<p>関心・意欲・態度</p>	<p>現代の国際社会や西アジアの動向に関心を持ち、国際紛争の発生の諸要因について意欲的に追究し、特にイラク戦争終結時における日本の役割について考えようとしている。</p>
<p>思考・判断</p>	<p>現代の国際社会や西アジアの動向から課題を見出し、国際平和について多面的・多角的に考察し、イラク戦争後に日本の果たすべき役割について、さまざまな立場、考え方を踏まえ、公正に判断している。</p>
<p>資料活用の技能・表現</p>	<p>現代の国際社会や西アジアの動向に関する諸資料をさまざまなメディアを通して収集し、学習に役立つ情報を主体的に選択して活用するとともに、国際紛争の諸要因、国際平和や国際協力の必要性、日本の果たすべき役割について追究し考察した過程や結果を適切に表現している。</p>
<p>知識・理解</p>	<p>現代の国際社会や西アジアの動向、国際機構の役割、国際紛争の諸要因をとらえる基本的な概念や理論を理解し、その知識を身に付けている。</p>

指導計画④⑤について

<p>関心・意欲・態度</p>	<p>平和主義の概念や日本国憲法第9条の解釈について、また、日本の安全保障について関心を持って取り組んでいる。</p>
-----------------	---

<p>思考・判断</p>	<p>平和主義の概念や日本国憲法第9条の解釈について、また日本の安全保障について多面的・多角的に考察し、さまざまな立場、考え方を踏まえ、一定の価値判断をすることができる。</p>
<p>資料活用の技能・表現</p>	<p>日本国憲法第9条の解釈の多様性や国際社会の中の日本の安全保障の実態についてさまざまなメディアを通して資料を収集し、主体的に取捨選択して活用することができ、日本の安全保障について考察した結果を適切に発表することができる。</p>
<p>知識・理解</p>	<p>日本国憲法第9条の解釈の多様性や日本の安全保障についての実態について理解し、その知識を身に付けている。</p>

四 本時のねらい・展開・評価

- (1) 本時のねらい 「自衛隊は増強すべきである」という論題を設定し、グループで追究させ、肯定・否定という対照的な考え方を対比させ、調査した資料を活用して、追究した過程や結果をディベートという手法を使い、立論や質問、討論を通して適切に表現させる。また、審判を行う生徒には「ディベート判定表」を使わせて観点別評価をさせる。さらにディベート終了後に行う判定において、単に合計点のみで勝敗を決するのではなく、三〜五名を一班とする班内において討論を行わせ、その過程と結論を「班別の判定表」に記録させ、班の代表者が班としての勝敗を報告する。これにより、さまざまな立場、考え方を踏まえて、公正に判

断することのできる能力を培う。

(2) 参考資料

防衛庁『防衛白書』 財務省印刷局

高柳先男『戦争を知るための平和学入門』 筑摩書房

猪口邦子『戦争と平和』 東京大学出版会

文部省『初めての憲法のはなし』 文部省

江幡謙介『安全保障とは何か』 平凡社新書

佐々木芳隆『海を渡る自衛隊』 岩波新書

抱喜久雄(他)『新・初めての憲法』 法律文化社

江畑謙介『日本の安全保障』 講談社現代新書

杉原泰雄『平和憲法』 岩波新書

杉原泰雄『憲法読本』 岩波ジュニア新書

「自衛隊は軍隊なのか―自衛隊の存在意義と実力―」(『日本の論点2001』文藝春秋 所収)

山内昌之「テロは米国を変えたのか―日本がとるべき成熟した国としての態度―」(『日本の論点2002』

文藝春秋 所収)

渡部治『日本の大国化は何をめざすか』 岩波ブックレット

浅井基文『「国際貢献」と日本』 岩波ジュニア新書

志方俊之監修『自衛隊』 日本文芸社

(3) 本時の展開と評価

津田博(他)『ウオッチング現代社会』 兵庫県高等学校社会部会編
 上原行雄(他)『新政治・経済 改訂版』 清水書院
 池田幸也(他)『2008 資料 政治・経済』 清水書院

学習内容	学習活動	指導上の留意点	学習活動時の評価
テーマ 「自衛隊は増強すべきである」 1ラウンド 肯定側立論 5分 否定側立論 5分 作戦タイム 2分 2ラウンド 肯定側質問 2分 否定側質問 2分 肯定側回答 2分 否定側回答 2分 3ラウンド 自由討論 10分 作戦タイム 2分 4ラウンド 肯定側結論 3分 否定側結論 3分	肯定側、否定側に分かれてディベートを行う。 ・審判を行う生徒は評価表をもとに評価を行う。 ・審判を行う生徒は発表内容について気づいたことをメモし、グループでの判定時のディスカッションの資料とする。 ・原稿の棒読みにならぬよう工夫して発表する。 ・自由討論は肯定側・否定側の順番にとらわれずにディスカッションを行わせる。 ・司会は論議がかみ合うよう、また活発に進行するように工夫する。	・調査、収集した資料を活用し、主張のポイントを5分以内で発表できるようにする。 ・調査して分かったことや発表のポイントを模造紙にまとめたり、整理したプリントを作成させて審判団に配付し、ディベート内容を分かりやすく行わせるよう工夫させる。 ・ディベートに参加しながら記入でき、ディスカッション時に活用できるワークシート(評価表)を準備し、記入させる。 ・司会担当の生徒にはディベートの手順や進行について、事前に指導を行う。 ・肯定側、否定側が調査追究した内容を活用しながら、ディベートを行わせる。 ・評価表を使って、自己評価を行わせる。	① 資料活用の技能、表現(各種のメディアを活用して適切な資料を収集できたか) (調査・収集した資料を活用してまとめたり、整理したプリントを作成させて審判団に配付し、ディベート内容を分かりやすく行わせることができたか) ② 知識、理解(それぞれに調査を担当した内容を理解できているか) ③ 関心、意欲、態度(国際平和の安全維持と自衛隊の関係について、意欲的にディベートに参加していたか) ④ 思考、判断(ディベートの発表、討論を通して学ぶことができたか) (自己評価を観点別に記入できたか) (調査、収集した資料を活用して立論できたか)
判定 10分	・ディベートを開きつつ、ワークシート(評価表)に記入した。評価を基に1グループ5人でディスカッションを行う。 ・グループ毎での勝敗を決定する。 ・グループとしての勝敗の理由を述べる。	・肯定側、否定側の発表について、評価表を持ち寄り、生徒同士の相互評価をグループ毎に行わせる。 ・各グループ毎に勝敗の理由も述べて、発表させる。	⑤ 思考、判断(国際平和の維持、発表を行う上での課題について考えることができたか)

五 展開の実際

(1) 立論(第一ラウンド)

司会者 これよりディベートを始めます。肯定側の立論を始めて下さい。

肯定側 日本を取り巻く国際情勢の変化から、自衛隊の役割が変化し、新しい情勢に適應した自衛隊を増強する必要性について述べることにします。

①自衛隊の誕生に至る歴史とその役割は、激化していく東西冷戦や東アジアの情勢の変化の中で生まれたということです。アメリカは第二次世界大戦後の日本に対して、徹底した非軍事化と民主化をめざしていたが、一九四九年の中華人民共和国の成立と一九五〇年に起こった朝鮮戦争をきっかけとして、日本の再軍備化を考えはじめたのです。一九五〇年の警察予備隊の創設、一九五二年には保安隊へと改組され、一九五三年の池田・ロバートソン会談により日本側は防衛力増強を約束し、一九五四年のMS A協定締結による軍事・経済援助受け入れを前提に、直接侵略および間接侵略に対しわが国を防衛することを主たる任務とする自衛隊が一九五四年に誕生することになります。この時点から一九八九年の冷戦の集結、一九九一年ソ連の解体までの自衛隊の役割は、激しく対立した東西冷戦の中で西側の北東アジアの最前線として東側の侵攻を食い止めることであつたと考えます。

②次に大きな意味を持つのは、二〇〇一年九月一日の「同時多発テロ」の発生です。これにより、今までの国家対国家という戦争の概念が変わり、思想対思想、民族対民族の様相を呈するようになったといえます。ブッシュ大統領のいう「新しい戦争」が始まったといえます。「テロ」というゲリラ的な

非合法の戦いに変化していったといえます。こうなると、今までの武器、例えばミサイルや戦車、軍艦といわれるような武器を多額の税金を費やして多量に保有していることは、「新しい戦争」に対して有利に働くとはいえなくなったというべきでしょう。

③よって、私たちは「同時多発テロ」以後の新たな脅威に対応できる「戦域ミサイル防衛(TMD)」や「テロ対策専門の特殊部隊の編成」を早急に増強すべきであることを主張します。

司会者 否定側の立論を始めて下さい。

否定側 私たちは「縮小すべきである」という論拠を三点挙げて立論します。

①自衛隊の海外派遣は現地の人々の役には立っていないということです。人道復興支援に派遣された自衛隊員五五〇人のうち、実際に活動しているのは一二〇人(浄水・給水支援三〇人、現地の医療支援四〇人、公施設復旧活動にあたる施設隊五〇人)で、四〇〇人以上が司令部や後方支援活動なのです。この人員配置から見ても「給水活動」というのは名目にすぎないと思います。次に示す「サマワで活動する自衛隊とフランスNGOの比較」の図を見て下さい。

	経費	
フランスNGO	約7000万円	600トン
自衛隊	約404億円	80トン

費用対効果からいえば、自衛隊はフランスNGOの約五七七倍の経費をかけて八分の一の仕事しかできていないこととなります。フランスNGOの試算によれば、十数億円あれば病院一つを立派に再建できるそうです。このことから、自衛隊の約四百四億円という経費がいかに法外なものであるかが分かります。

アメリカ			日本		
	名称	推定価格	名称	推定価格	生産形態
戦車	M1A1	約5億円	90式戦車	約8億円	国産
装甲戦闘	M2	約6億6000万円	89式装甲戦闘車	約7億円	国産
装輪装甲車	LAV-25	約7000万円	96式装輪装甲車	約1億2500万円	国産
小銃	M-16	約7万円	89式小銃	約32万円	国産
哨戒機	P3C哨戒機	約43億2千万円	P3C哨戒機	約100億円	ライセンス生産
イージス艦	アーレイ・バーク	約1200億円	みょうこう	約1400億円 ※	艦体は国産
輸送機	C-130H	約16億9千万円	C-130H	約50億円	輸入
戦闘機	F-16C	約35億8千万円	F-2	約120億円	輸入

※ システムは輸入による

ます。明らかに自衛隊が「復興支援」に役立っていないことの証明になると思います。

②自衛隊は税金の無駄使いをしているということを証明します。次の「日米装備品比較」の表を見て下さい。

日本とアメリカの装備品の価格比較をすると、明らかに日本の装備費用のほうが高額です。この理由は、日本国内で開発・生産され、最新技術を盛り込むためでもあります。また、日本はアメリカやロシアなどと違って武器輸出を禁止しているため、自国消費分しか生産できないため単価が割高になるのです。このうちの一つでも輸入に切り替えるだけで三八一億五〇〇万円の削減が可能です。例えば、東京ドームの建設費が約三五〇億円ですから、これも大きな無駄使いといえます。

③自衛隊は明らかに専守防衛に必要な最低限度の実力を越えているということですが、これについては、イージス艦とクラスター爆弾について調べました。まずイージス艦は、世界でもアメリカ、スペイン、日本の三か国しか保有していません。防衛目的とはいえ、五四口径の一七ミリ砲や外国まで到達可能なミサイルを搭載できる艦船を持つこと自体が問題です。また、インド洋で展開させることは周辺諸国への脅威になるといえます。クラスター爆弾は、(資料の図にあるように)二〇〇個以

上の子爆弾が内蔵されており、空中でバラ卷かれ二〇〇m×二〇〇mの範囲に飛散します。このため、あらゆる方向から爆風が襲いかかり、逃れることが困難です。それ以上に怖いのは、その内の5%は不発のまま残り、地雷と化すことです。これは「わざと」です。そのため、戦争終了後も長期にわたって人々を苦しめるのです。今からお見せする写真は「ショックキングな画像ですが、「悪魔の兵器」ともいわれる武器をこの世界から消し去るためにも見てほしいと思います。この少年は、ラオスで被害にあったのです。クラスター爆弾は表面がきれいに彩色されているため子供が興味を持ち、近寄った子供が被害に遭うのです。このような被害が世界中で繰り返されたため、一九九六年の国連人権委員会で非人道兵器として使用禁止の対象に上げられています。国際赤十字でも国際的な使用禁止を要求しています。自衛隊は、このような兵器を一四八億円分、個数にして約八七〇〇発も保有しています。この数は、神戸市を一・二二六個分、甲子園球場を一七五八個分焼き払うことができます。私たちの北須磨高校は、二個で焼き払うことができます。日本はもちろん専守防衛ですから、このような兵器を保有する必要は全くないと考えます。よって、自衛隊は装備を縮小すべきです。

司会者 立論に対する質問を行うために作戦タイムを与えます。

(二) 質問と回答 (第二ラウンド)

司会者 肯定側から否定側へ質問を行って下さい。

肯定側 二点について質問をします。

① 自衛隊を縮小して、日本は国際平和にどう貢献するのですか。

② イージス艦の威力について過剰なものであるかのようにいわれましたが、では万が一日本がミサイ

ル等で攻撃された場合、どのようにして守るのですか。

司会者 否定側から肯定側へ質問を行って下さい。

否定側 自衛隊が行うテロ対策について、抽象的でよく分かりせん。詳しく説明して下さい。

司会者 双方の質問に答えるための作戦タイムを与えます。

司会者 では、肯定側から否定側に出された質問に答えて下さい。

否定側 ①についてですが、逆のことを考えてみて下さい。自衛隊の装備を増強してしまうと、それは他国を威圧することとなり、身構えさせ、緊張状態を招くこととなります。私たちは装備を縮小することにより、その費用をODAへ振り向け、贈与をふやし、技術支援等を活発化することで、日本への信頼や尊敬を得ることが大切です。武器を保有し、その力を誇示して平和を説くのではなく、経済大国としてのその経済力を有効に活用して、平和を追求すべきです。

②について、発射されたミサイルをイージス艦に搭載のミサイルで迎撃できることの確実性は低いといわれています。それに、今この国際情勢の中で日本を本気で攻撃しようとする国が存在するでしょうか。常識を持って攻撃することのメリット・デメリットを比較考量すれば、そのようなことは起こりえないと考えます。

司会者 否定側から肯定側に出された質問に答えて下さい。

肯定側 私たちは、現在の日本を取り巻く情勢を考えて、まず、今までのような自衛隊の装備の比重は減らして、「戦域ミサイル防衛(TMD)」へ移していくべきだと考えます。まずミサイル防衛とは、ピンポイントで弾道ミサイルを打ち落とす技術で、敵がミサイルを発射しない限り迎撃することはありえないので、

専守防衛の典型のようなシステムです。TMDの導入に対しては、迎撃の確実性への疑問とその費用対効果の面から「むしろ敵地攻撃能力を保有すべきだ」との主張もあります。仮にその主張通りに実行するとすれば、現在の戦闘機を敵地攻撃用のストライク・イーグルに変え、敵のレーダー網を破壊し、地对空ミサイルを避けて飛ぶ高度の技術を持つパイロットを育成しなければなりません。しかしそれには膨大な費用と時間が必要です。TMDの導入は納税者にとっても望ましい選択肢になると考えます。

さらに、「同時多発テロ」後に頻発する、国家でない武装集団の攻撃に対処するために、陸上自衛隊が作る「テロ対策専門の特殊部隊」の増強が必要です。早急に行わないと、イラクへの自衛隊派遣後、アメリカに同調していると思われる日本で「無差別テロ」が起こらないとも限らないと考えるからです。

司会者 これで質問と回答を終了し、次の自由討論に移ります。これまでのように発言順は特に指定しませんが、発言時間は一人一分以内です。では、始めて下さい。

(3) 自由討論(第三ラウンド)

否定側 ミサイル防衛は、費用対効果とその実効性に疑問点が多すぎる。過去にアメリカは、ミサイル防衛計画が失敗し、経済的にも落ち込んだという歴史がある。やっと不況から脱しつつある現在の日本で、ミサイル防衛を実施すればアメリカの二の舞になる虞がある。また、日本をミサイル攻撃するような行動をとれば、国際社会から非難を浴び、国際的な制裁を受け、孤立化し、その国家の存在すら危うくなるはずだ。そんなリスクを冒して日本を攻撃する可能性はない。

肯定側 他国がミサイル攻撃をしてくる可能性が有るか無いかというのは推測に過ぎない。九九%可能性が無

くても1%の可能性があれば、それで日本は滅んでしまう。そんな時に、金額の使いすぎだなどということ議論すること自体がおかしい。

否定側 人類の歴史を見ると「目には目を」という報復の繰り返して、悲惨を拡大してきた。武力を相手に見せつけることで、相手側の意地や警戒感を増幅させ、状況をより悪くさせてきた。ミサイル防衛に多額支出をするのなら、それをODAに振り向ける方が平和の確立に効果があるということはアメリカ政府も発言している。

肯定側 今一度、平和の意味について考えてほしい。平和とは、決して非武装そのものを意味していない。国家の安全をいかに侵されないようにするかに最大限の配慮をし、国民の生命、自由、安全を保全することではないでしょうか。(授業で使用する『資料集』の)一六六頁に自衛隊法が載っています。その二条に自衛隊の任務が規定されています。侵略の虞が皆無といえない現在では、自衛隊の存在と専守防衛のための装備は不可欠です。これからの日本の平和維持にはとても重要なものです。

否定側 なぜ他国や武装集団が日本を攻撃するのか、その根拠がまだ分からない。

肯定側 北東アジアの現状を直視すべきだ。

否定側 私たちは、政情の不安定さや戦争の発生の根底には貧困があると考えます。貧困が改善、解消されれば争いは起きない。ユネスコ憲章にも「戦争は人の心のなかで生まれるものであるから、人の心のなかで平和の砦を築かなければならない」という言葉がある。ミサイル防衛で外側を固めるより、ODAを活用して貧困から人々を抜け出させる方がよりよい国際関係を作ることになる。

司会者 討論を止めて下さい。作戦タイムの後、結論を述べて下さい。

(四) 結論(第四ラウンド)

司会者 では、肯定側から結論を述べて下さい。

肯定側 このデイベートを通して私たちの主張したいポイントは示し、論拠も明らかにしてきました。最後に結論として敢えて主張するとすれば、今の日本の平和にとって、周辺の国際情勢を考えれば、必要なのはミサイル防衛とテロ対策です。通常の装備は縮小して、防衛装備の重点を「戦域ミサイル防衛(TMD)」と「テロ対策専門の特殊部隊」の増強へ移すべきです。

司会者 否定側から結論を述べて下さい。

否定側 日本の安全を守る方法は、日本国憲法前文に謳われている国際協調主義に基づき、ODAの増強を行うことです。戦争やテロ発生の根源にあるのは貧困です。日本の防衛費は約四兆五千億円です。ODAは約八千億円です。これを逆転させるのです。これにより多くの人々を救うことができます。この人々が日本を評価してくれるはずで、武器で固め、周辺諸国を威嚇することで「平和」を創り出すのではなく、ODAで自国を守るのです。自衛隊は災害派遣や復興支援業務に力を尽くすべきです。ミサイル防衛やテロ対策の特別部隊の編成などで多額の税金を支出するべきではありません。人類は過去の歴史から学び、そろそろ戦いによる問題解決の方法を止めるべきです。日本国憲法前文の「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」を実現し、世界平和のリーダーとなるべきです。そのために自衛隊の縮小は必至です。

司会者 これでデイベートを終了します。審判員は、デイベートを聞きつつ評価したワークシート(「デイベー

ト判定表」を持って、グループとしての勝敗を決定する判定の作業に移って下さい。グループの代表者は司会のところまで「班別の判定表」を取りに来て下さい。

(五) 判定

司会者 審判のグループごとに行った判定の結果とその理由について発表して下さい。

審判団 A どちらも資料がよく整っていた。否定側は ODA の貢献による平和の創造を主張し、自衛隊の縮小による ODA の増大という方法論は良かった。しかし、肯定側の日本の平和を維持するためにどうすればよいかを資料を駆使して「1%でも攻撃される可能性があるのなら、それを回避するためにはどうすればよいか」を論証したところを私たちは評価したい。よって肯定側の勝利とします。

審判団 B 日本への攻撃の可能性とその被害の大きさを想像すれば、ミサイル防衛の必要性がよく理解できた。一方、否定側の主張する平和を維持し戦争を無くするためには貧困の撲滅が必要であるという論はそのとおりだと思うし、クラスター爆弾の被害を受けた子供の写真を見せられた時は、否定側の主張に傾いた。しかし、現実の日本を取り巻く状況を基に平和を維持する方法を考えていくと、豊富な資料に沿って論理を展開した肯定側の主張が説得力を持っていた。よって私たちは肯定側を勝ちとします。

審判団 C 否定側の資料の豊富さと、立論のまとまりが優れていた。否定するための対案をきちんと用意し、論点を ODA に絞り、正確に論拠を述べていたので、主張を理解することが容易だった。現実はどう対応するかも必要だが、理想を持ちその実現に向かっていく姿勢を持ち続けながら、現実の問題解決を考える姿勢が必要だと思う。その姿勢を強く主張した否定側を私たちは勝利と決めました。

司会者 本日の「自衛隊は増強すべきである」とのテーマで行ったディベートは、二対一で肯定側が勝利しま

ティベート判定表

ティープ	実施日	
MEMO (判定に関することやティベート中に気がついたことなど)		

評価基準	評価 (数字を○で囲む)									
	肯定側					否定側				
資料の準備はよかった	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
分かり易く主張内容は明確だった	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
大きな声が出ていた	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
聞き手を見て発言していた	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
判定	計 () 点					計 () 点				

上記のように判定した理由

3年 () 組 () 番 氏名 ()

班別の判定表

ティープ	実施日	
() 班 班員名 () () () () () ()		
肯定側 (班) の良かった点	否定側 (班) の良かった点	

結果	判定表の個人の評価点の合計		肯定側 () 点		否定側 () 点	
	班別討議の結果		肯定側		否定側	
勝った方を○で囲む						

班別結果の判定理由

した。これで終わります。

六 まとめ

生徒自身が学んだことを通して自分の意見を持ち、順序立てて自説を展開し、討論することで視野を広げ、知識を学ぶ楽しさを実感させる方法として、ディベートを取り入れている。一単元の構成の中で、その授業のまとめとして位置付け、この一年間授業実践を行ってきた。

ディベートを行うためには、基礎知識の習得はもちろんだが、スピーチやプレゼンテーションの技法も必要となる。「知を総合化」するためのツールとしてディベートを活用するとともに、その限界も認識しつつ、克服するためにも授業実践を積み重ねていこうと考えている。

学校設定科目「ウォッチング現代」を通して、論理的に思考し、的確に表現できる能力を育み、現状を具体的にどう変えるかを考えることのできる生徒を養成できればと考えている。

生徒がこの授業をどう見たかを検証する参考として、この一年間「ウォッチング現代」で「ディベート」を体験した生徒の感想の一部を掲載しておくことにする。

・先生の言われた「調べれば調べるほど楽しくなる」という正にそれだった。本番もあの緊張感を楽しめた。自分には「自衛隊は増強すべき」と主張した以上、これからの政府の動きを見続けたい。

・「ウォッチング現代」の授業形態は、受け身ではなく、教師と生徒、生徒と生徒が自ら考え話し合うことが多かった。面白かったし、知識の吸収も早いと思った。こういうのが「学習」だと思います。

・ただ本を読んだり話を聞くだけではなく、自分で調べて、自問自答し、自分の意見を持たたことは、自分のス
トップアップにつながりました。しかし、本当に資料の収集、データをまとめることは大変でした。大学生になっ
たら、専門分野を学べるし、もっと多くの世界的な問題に目を向けて行きたいです。

・とても面白かったです。一つのことをずっとずっと深く調べるといえるのは、受験勉強の中ではできない。例え
ば、一つの条約がどのように変遷してきたかをきちんと理解するのに周辺知識がたくさんいることが分かりまし
た。私は大学に入るまでの学習内容は知識の深め方、探究の仕方を知るためのものだと思っています。

・私は、討論を聞いていて、自分の中で「自衛隊は縮小すべきだ」と確固たる理由もなく思っていたけれど、そ
れではいけないなと思った。新聞を読んだりテレビを見たりして、どうしてそう思うのかを人に説得できるだけ
の知識を持っていたいと思う。また、反対の意見も最初から見ない聞かないという姿勢ではなく、広く取り入れ、
考えを深めて行きたいと思った。

・最近の新聞で、自衛隊の新体制についての記事が載っていて、読んで見るとまったく私たちが準備で調べて考
えたことがそのまま載っていた。社会について考える人間の一人になれたようで、少し自分に感動した。